

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌 等又は発表学会等 の名称	概 要
1 (著 書) 薬理学—医薬品の作用—	共著	平成 17 年 9 月	廣川書店	薬理学を初めて学ぶ学生だけでなく、卒業後も薬物治療など医療の現場で参考になる教科書として作成した。(約 500 頁) (竹内幸一、福井裕行、栗原順一、 <u>藤田貢</u> 、他 12 名) 担当部分 :「血液・造血器官に作用する薬物」の章(約 25 頁)を担当した。
2 (学術論文) Protein C inhibitor as an anti-disseminated intravascular coagulation agent – mechanism and modification [Review]. 《筆頭論文》	共著	平成 16 年 1 月	Curr.Med.Chem. Cardiovasc. Hematol. Agents Vol. 2, No. 1 pp.21~27 Bentham Science Publishers Ltd.	本総説では、抗 DIC 因子としての PCI に焦点をあて、PCI は血漿カリクレインおよびトロンビン(いずれの酵素も血液凝固—線溶系に直接および間接的に関与する酵素であり食細胞の走化性因子でもある)の阻害を介して DIC でみられる血液凝固異常、全身性炎症反応および二次線溶の亢進を抑制する可能性があることを我々の研究成果(①Thromb. Haemost., Vol. 84, 54—58, 2000、②Biol. Pharm. Bull., Vol. 23, 1046—1050, 2000、③Thromb. Res., Vol. 104, 65—74, 2001、④Thromb. Res., Vol. 105, 95—102, 2002)に基づいて紹介するとともに、PCI の抗 DIC 作用の発現には Asn 結合糖鎖が必要であること、さらに第一番目の Asn 型糖鎖結合部位に変異を導入して作製した Asn230Ser-PCI は野生型 PCI よりも顕著に強い抗 DIC 作用を有するだけでなく野生型 PCI の Glycoform であるため自己抗体産生の危険性も少なく DIC の治療薬として開発できる可能性があることを論述した。(7 頁) (<u>藤田貢</u> 、泉谷和歌子、高橋健一) 担当部分 :本総説作成・発表の全てを担当した。
3 (学術論文) Anti-osteoporosis effect of 5-bromo-2-(4-chlorobenzoyl)-(Z)-3-(2-cyano-3-hydroxybut-2-enonyl)aminobenzo[b]furan: a novel selective estrogen receptor modulator.	共著	平成 23 年 5 月	J. Pharmacol. Sci. Vol. 116, No. 2 pp. 214~220 The Japanese Pharmacological Society	培養破骨細胞および卵巣摘出骨粗鬆症モデルラットを用いた検討で、MU314 は破骨細胞の E ₂ 受容体に作用し、骨吸収抑制効果を示す一方、子宮では E ₂ 作用を示さない SERM 化合物であることを明らかにした。(7 頁) (福山亮、下川晃生、児玉安史、 <u>藤田貢</u> 、大石義孝、安藤裕子、小井田雅夫、中牟田弘道) 担当部分 :主にマウス由来破骨細胞を用いた MU314 の骨吸収抑制作用の検討と卵巣摘出骨粗鬆症モデルラットの施術を担当。 (担当頁特定不可能)
4 (学術論文) Antihypertensive effects of continuous oral administration of nattokinase and its fragments in spontaneously hypertensive rats. 《筆頭論文》	共著	平成 23 年 11 月	Biol. Pharm. Bull. Vol. 34, No. 11 pp. 1696~1701 Pharmaceutical Society of Japan	ナットウキナーゼ (NK) あるいはナットウキナーゼ由来のペプチドを含有する飼料を自然発生高血圧ラット (SHR) に摂取させ、両者の効果とその作用機序について検討し、NK が完全体 (プロテアーゼ活性有) として吸収された場合は血漿フィブリノーゲンの分解を介して降圧作用を示すが、ペプチドとして吸収された場合はアンギオテンシン II の産生を抑制することにより降圧作用を示すことを明らかにした。(6 頁) (<u>藤田貢</u> 、大西克典、高岡晋作、小笠原和也、福山亮、中牟田弘道) 担当部分 :実験計画から実験実施および論文作成・発表を全て担当した。(pp. 1696-1701)